

産まれていた。

鉢植えのカラスザンショウを庭に放置しておいたところ、毎日に幼虫は減りすべて消えてしまった。恐らく、クモかアリに捕食されてしまったものと思われる。

<参考文献>

唐土洋一(1981)カラスザンショウを食べるキアゲハ てんとうむし(7):24

兵庫県美方郡温泉町のギフチョウ

唐土 洋一

① 1993年5月13日、扇ノ山(1,310m)へギフチョウの観察に向いた。ウスバサイシン喰いのギフチョウがいると聞き及んでいたためである。一路、R29を北上し鳥取県の八東町富枝より「丹比ふるさとの森」を経由して登山口へ、そこより歩くこと63分で頂上に立つ(扇ノ山への最短コースである)。風強く曇り空、気温も低い、とてもチョウの飛んでくる状態ではない。頂上避難小屋にて休息後、兵庫県の畑ヶ高原に降りるべく尾根を北へ約5分たどると、何と、大ズッコから北東面の谷は雪また雪、この装備ではとても降りられそうもない。やむなくもとの道を引き返す。

② 1994年6月1日、ギフチョウの飼育も一段落といったところ、さてと、もう一度チャレンジしてみようかとR29を北上、鳥取県の群家町堀越より雨滝街道、河合谷林道を経て入山。

林縁沿いを探すこと約30分で7卵塊(6, 6, 6(1), 5, 4(1), 4, 3卵)計26卵と2卵塊計8卵痕が確認出来たが、何者かに吸われている空卵が結構あった。

ここでは、ウスバサイシンとサンインカンアオイが入り交じって生えており、卵は明るい林縁沿いのサンインカンアオイの方に産み付けられている。ウスバサイシンは完全に葉が伸びきっており、

花も少ないながらもついていたが殆ど見受粉花であった。持ち帰った卵、3卵塊計13卵は6月3日から6月6日にかけて孵化し、ウスバサイシン、サンインカンアオイの2通りで飼育したが、どういわけか食いつきが悪く、若齢期に多く死んでしまった。終令時に一部ヒメカンアオイを与え、6月30日にしてようやく蛹になったが、たった3頭という惨憺たる状態であった。高温時の飼育という悪条件に加え、若齢時には柔らかい新葉が必要なのかもしれない。

(補足) 越年させた3頭の蛹は、管理が悪かったのか死亡していた。多雪地帯のものは、冬場の乾燥に弱いような気もするので、再度挑戦して、調べてみたい。

追記：扇ノ山方面は林道が整備(ダート道もあり)されており、特に走行に支障をきたす事はないが、たまに不愉快な思いをすることがあるので気になるかたは関係先に問い合わせしてから入る方がよい。どういことかという、雪解け後の「法面の崩壊、土砂崩れ防止等」の治山工事に出くわしたときである。工事の請負先が道路使用許可条件を下請けに順守させずに着工させているケースが見受けられる。特に、「通行止」の場合に問題があり、工事通告・迂回路等の表示を怠っているがために、「通せ、通さない」といったもめる因となり、最悪の場合、もとの道までえんえんと引き返さなくてはならない。特に、平日の日は要注意である。

<問い合わせ先>

①河合谷林道 鳥取警察署(県警本部)

0857-23-0111

②扇ノ山林道、河合林道 群家警察署

0858-72-0078

③扇ノ山から広留野への立ち入り 管理者：小谷久雄(鳥取県議)

0858-84-3139

注) 開拓道路は、道幅も狭く急勾配である。特にダイコンの出荷時期には大型トラックが通行するので、入山を控えるのが望ましい。